

# 佛法僧

李 仁 嬋

## 目 次

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 一、序 論          | 3. 登場人物と歌のやりとり |
| 二、本 論          | 4. 「佛法僧」とその文藝性 |
| 1. 豊臣秀次とその時代背景 | 三、結 論          |
| 2. 「佛法僧」の典拠と構想 |                |

## 一、序 論

近世人ほど、怪異を怪異として楽しみえた人間はいなかつたし、近世人ほど、怪異を、それが期待と幻想の中にしかないことを知りながら、現実化しえて楽しんだ人間もいなかった。

怪談という文藝の形式が、その成り立ちにおいて、何らかの意味で口承性、傳承性を持つことは言うまでもない。すなわち、傳承を通して民衆の中に定着した共通所有の感情の確認として、もしくはその極度に増幅された表現として語られるのが、怪談の特徴であるといつてよい。

だが、その説話が物語様式に、改變される時、そこには説話に通有の認識とは別の、獨自な人間理解が提示される必要があつた。怪談が怪異に遭遇した民衆の恐怖と戦慄を語るものであるとすれば、怪異小説が含んでいる目的は—少なくとも秋成が求めようとしたものは—怪異の存在自體の意義を問い明らめる眼を持つことであつたと言えよう。

ここに上田秋成の噂話の物語化という「佛法僧」の基本構想と創作性の意義は、豊臣秀次という一人人間の生死と現形の意味そのものを問い直していくことであつたのである。

上田秋成は、小説の作者であつて、<sup>(1)</sup>「百物語」に打興じた座の話者とは異つた。秋成は、現實世界を超越することになつたが、彼自身は決して超越者として姿をあらわしていない。みずから超越するのではなく、「讀者をして超越せしむる」のが、小説であるからである。怪異はそのままでは、説話になつても「小説」にはならない。秋成の怪異小説は、幻像と意識という二極間の緊張を構造的に提示することによって、特有の空間性を獲得したのである。

「佛法僧」は、日本江戸時代の徳川家康が百年間續いた戦亂の天下を武力で統一したのを受けつき、幕府政權をとった或る初夏のことである。世の中の表面は、うらやすの國といわれて、久しくおだやかに治まり、人々は家業に楽しみはげみ、その暇には、春は花の下でいこい、秋は錦のように美しい紅葉の林を訪ねたり、遠くは九州の國々の景色も知らなくてはと、船に乗って出かける人が、富士や筑波山の景色に心をひかれるのは、太平の世のもたらした一般國民の浮かれ心地であった。

この江戸時代の伊勢の國相可<sup>(2)</sup>という里に、拜志氏という人がいた。その時代の多くの人がそうであつたりに、拜志は、家督を早々とあつぎの長男に譲って、何も忌み嫌うような理由があつたのではないけれども、剃髪して、その名を夢然とあらためた。元來丈夫で病氣さえしたことなく、あちこち諸國を旅して歩くのを老後の楽しみとしていた。拜志夢然は、風流三昧の樂隠居で、その子作之治を連れて、遊山の途次、豊臣秀次の自殺を強要された場所である高野山<sup>(3)</sup>に詣でて靈城である高野山の奥の院で夜を明かすことになった。その際、この山で自刃して果てた豊臣秀次の一行の亡靈が現われ、見つかって酒宴の相手にさせられたばかりでなく、地獄まで連れてゆかれようとしたが、夜が明けはじめたので亡靈一行は消え去つたという怪奇な話である。

豊臣秀次は豊臣秀吉の甥である。秀吉が自分の關白の職を他の家にゆずりたくはないし、豊臣氏が續けて保ちたいことから、自分には子がないのにもかかわらず、自分の姉の子にその位をゆずつた。その後、その實子が生れてからいろいろと嫉解が起り、秀次は殺生關白といわれ、慘忍なことを平氣でやるといううわさをされた。それが、遂には秀吉に對する謀反の心があると石田三成<sup>(4)</sup>や増田長盛<sup>(4)</sup>に進言せられて高野山に追放された。そこで、秀次とその一行は、最後に泰平な世の中に、一人歴史の悲惨な流れに埋まれ、この地で主従非業の死に至つた。

徳川家康の前の豊臣家のこのことは、當時大變有名な事件であり、「聚落物語」や「恨の介」<sup>(5)</sup>などという小説にも書かれている。<sup>(6)</sup>

秋成はこの佛法僧の作品の中にそのことをたくみに採り入れたわけである。怪異談としては目新しい創作とも言える。高野山の實寫と歴史上の人物の亡靈の活寫とがあい待って生き生きした一篇であると云える。

- 1) 百物語：數人のものが集まり、各人が怪談を話すことに灯心を一つずつ消していき、丑三ごろ百節が全部消えた時妖怪が現われるという遊びの會
- 2) 伊勢の國：現在の三重県多氣郡相可町。
- 3) 高野山：和歌山県伊都郡高野町にあり眞言宗の總本産。弘法大師の開基。
- 4) 石田三成、増田長盛：豊臣秀吉の臣下で秀次が秀吉に謀反があると讒言を進言した。
- 5) 聚落物語：豊臣秀吉の榮華を描いた物語。
- 6) 恨の介：二冊、作者未詳、慶長末年成立。關白秀次と共に落命した木村常陸の息女の雪の前が恨の介と契つたが遺瀬がままならず、恨の介は無れ死にした。それを知つた雪の前も悲歎の餘り自害するという悲戀物語。

以上のような内容をもって「佛法僧」について、本論においては、先づその怪談物語の主人公である豊臣秀次とその時代をさぐり、その「佛法僧」における典拠と構想、登場人物や歌のやりとり、秋成の藝術性などを調べることによって、翻案小説としての「佛法僧」の独立性とその文藝的価値を考えて見ようとするのである。

## 二、本 論

### 1. 豊臣秀次とその時代背景

一五世紀後半から一七世紀前半までの二〇〇年たらずは、日本の歴史でも、もつとも波亂にみちた變革の時代であった。

應仁の亂から一〇〇年のあいだは、ふるい權威とそれをささえた世の仕組みが、音をたててくずれていった。社會の上から下まで、あらゆる階層の人びとは、ただ自分の實力をたよりに生きるほかはなかった。戰亂のなか、死となりあわせの日常で、人びとはゆたかな生活をさがしとめて、さまざまな動きをしめた。一方に、一向一揆(7)や堺の町(7)に代表される民衆の自治があり、他方に、軍勢力と法の力によって領國支配をすすめる戰國大名がいた。やがて織田信長があらわれて、大名の手による天下統一をめざし、豊臣秀吉がこれをうけついだ。

天下統一から大陸へ目ざした主君の織田信長のかたき、明知光秀(8)を討って、彼のあとをついだのは豊臣秀吉であった。柴田勝家(9)をやぶり、徳川家康とたたかった秀吉は、大阪城をきずき、關白となった。

秀吉は、檢地、刀狩など、天下統一への政策を着ちやくとすすめながら、金銀の鑛山を自分の領地とおさえ、大商人と手をむすんで富をくわえていった。やがて、九州の島津氏(10)關東の北條氏(11)を征服して天下人となった秀吉は、大陸の中國、朝鮮へと野心をひろげた。二度にわたる我が國への出兵は、その當時の韓國の人びとをくるしめたばかりでなく、日本の武士や農民にも、大きな負擔となった。

7) 一向一揆：戰國時代、一向宗（眞言本願寺）門徒の起こした一揆（反亂）。

堺の町：攝津と和泉と河内の國境にできた町。ふるくから大和（奈良）のつながりがふかく港町として鎌倉時代すでに名が知られていた。

8) 明知光秀：（一五二八～八二）美濃（岐阜県）の土岐氏の一族といわれ、織田信長にとりたてられ部將となる、當時近畿地方全體の武士團の指揮官であった。

9) 柴田勝家：織田信長の臣、越前の城主、天正十一年（一五六三）。豊臣秀吉を除こうとして失敗し、越前北六庄にて自刃。年六十二。

10) 島津氏：九州の領主。豊臣秀吉に政征された。

11) 北條氏：關東の領主。豊臣秀吉に政征された。

このように国内外に野望と勢力を擴げた豊臣秀吉は自分自身の子供がなかった。それで關白の地位を長く豊臣家が維持するためには近い親戚である姉の子の秀次に地位をゆずるほか仕方がなかった。

豊臣秀次(一五六八～九五)は、文祿四年(一五九五年)七月十四日、文祿、慶長の役のさなか<sup>(12)</sup>、<sup>(13)</sup>に、謀反のうたがいで、その關白という地位を追われ、高野山青巖寺(現在の金剛峯寺)において二十八年の生涯を閉じた。時は韓國ではちょうど壬辰、丁酉の亂のさなかであった。その墓は光臺院の裏山にある。また秀次の子供妻妾は京都三條河原で斬首された。近くの瑞泉寺境内に墓があり、世に惡逆塚(畜生塚)と呼ばれている。

豊臣秀吉は、秀次を養子とし、彼に關白をゆずったのは、一五九一年一二月のことである。これには關白の地位を豊臣家が世襲し、他に譲りたくないという意味がこめられていたのは勿論のことである。ところが秀次にその職位をゆずったあと、秀吉には淀殿とのあいだに秀頼がうまれたため、子が生れたからには、それをとりかえそうとし、秀次事件がおこったのだと考えられるのも無理はないだろう。

關白の地位を利用して日本を統一し、その目を明征服にむけたいま、秀吉は、その實力と權威をいちだんとたかめるため、朝廷の官職とは關係のない太閤<sup>(14)</sup>となって、關白を自分のおもうよううごかそうとした。

ところが、朝廷から大名たちにあたえられる官職・官位は、關白秀次の權限のもとにあった。

こうなると、關白どころか大名たちの統制も、秀吉の意志のままにはならなかった。このゆきづまりが秀次事件の真相のように民衆は勿論、秋成にも思われて、秋成は「佛法僧」の怪談物語に秀次一行の亡霊を現形させ、民衆の恐怖と戦慄の感情をかき立てるために代表者として夢然を登場させ、秀次の生死及び亡霊出現の意義を問い直し、強調するのではないだろうか。

## 2. 「佛法僧」の典據と構想

江戸時代には雑多の小説が多く現われたが、文藝的な價值において際立った光彩を放ったのは、西鶴の浮世草子と秋成の讀本である。西鶴の浮世草子は、特有のリアリズムに近代人の興味をそそるものがあり、秋成の讀本は浪漫的な色彩の中に不思議な魅力をたたへている。

12) 文 祿：後陽成天皇時代の年號、一五九二年十二月～一五九六年十月。

13) 慶長の役：一五九二年～一五九七年豊臣秀吉が行った朝鮮出兵、秀吉の死亡によって撤兵。

14) 大 閤：攝政、大政大臣の尊稱、關白を子に譲った人。 豊臣秀吉。

15) 西 鶴：井原西鶴：(一六四二～一六九五)浮世草子作者、俳人、大阪の人、武士固有の義理の生活をも描いて形式内容ともに新しい文學分野を開いた「好色一代男」によって浮世草子のもとを開き、以後好色物、武家物、町人物などによって町人層の愛慾、經濟、倫理全般にわたって獨特の文體による鋭い描寫を見せた。

古來日本の文藝には、和歌に本歌取りの技法があり、物語などにも引歌ということがしばしば行われているように、先行の作品を踏まえて新しいものを創り出すことが一つの著しい傾向をなしている。江戸時代には多く古典を利用し、中国の小説を翻案もしくは翻譯したものがあつたが、特に讀本に至っては中國種の翻案物が優勢になつた。そういう中であつて、秋成は獨自の見識の下に、數々の和漢の作品を自家藥籠中のものとして、個性の鮮やかな藝術的な香りの高い小説をまとめ上げたのである。

そのような事情からして、この「雨月物語」の第五話「佛法僧」の典據を探り、それらが秋成の藝術的な構想の手腕によって、どのように生かされ、新しい世界の形成に與つたのであるかということを見究め、文學作品としての「雨月物語」の眞價に迫ろうとするのである。

和漢の古典についての豊富な知識の上に成りたつている「雨月物語」は、讀者の側にもそういう和漢の古典に高度の教養のあることが豫想されたはずであり、靈異神經な世界を描き出すことによって、讀本は浪漫的な色彩の濃厚な作品になっている。「雨月物語」にあつては、人間のあり方を律する「性」が、秋成獨特の目で見つめられ、その必然的な發現の様相が超現實的な事件を通して展開されて、縹渺たる浪漫的雰圍氣の中に人間の生きるべき姿が示されている。

「佛法僧」は、作者秋成の高野山における見聞、感想と、その地で非業の死を遂げた豊臣秀次に關する怪異談とをもとに構想された怪異小説である。

また、ここに「佛法僧」の典據を見るに、この作品は、他の諸筆と同じく、和漢の多くの文獻や作品を典據として成立した翻案小説であるということは、すでに述べた通りである。これまで多くの先覺の典據考證によつて、豊臣秀吉、淀君と秀次の確執と、秀次の惡行、および石田三成、増田長盛らの讒言による秀次主従の非業の死に至る經緯を記した、小瀬甫庵<sup>(16)</sup>の「太閤記」<sup>(17)</sup>の記事を作品の背景におき、大江文坡<sup>(18)</sup>の『怪談とのみ袋』<sup>(19)</sup>卷之四「伏見桃山亡靈の行列の事」<sup>(20)</sup>を作品全體の構成に關わる典據として、一部分の構成や表現のために『遍昭發揮性靈集』<sup>(21)</sup>卷十、『源氏物語』<sup>(22)</sup>「手習」<sup>(23)</sup>の卷、『風雅和歌集』<sup>(24)</sup>、『太平記』<sup>(24)</sup>卷二十五「官方怨靈會六本杉事附醫師評定事」、

16) 小瀬甫庵：(一五六四～一六四〇)豊臣秀次、堀尾可晴、前田利常に仕えた。軍事、歴史を學び、「太閤記」「信長記」の著がある。

17) 太閤記：豊臣秀吉の傳記。二十卷、小瀬甫庵著成立一六一七。

18) 大江文坡：「怪談とのみ袋」編者。

19) 怪談とのみ袋：大江文坡の編んだ怪談集。

20) 伏見桃山亡靈：「怪談とのみ袋」の卷之四。

21) 遍昭發揮性靈集：高野山を開いた空海の文集。

22) 源氏物語：手習—平安時代の物語、紫式部(十一世紀成立)五十四帖。

23) 風雅和歌集：勅撰和歌集、貞和五年(一三四九)成立。

24) 太平記：軍紀物語、作者未詳、書きつながれて南北朝末期成立？南北朝争亂の五七年間を和漢混交文で書き出す。

『戴恩記』<sup>(25)</sup>、『加婢子』<sup>(26)</sup>卷五「幽靈評諸將」、『怪談とのり袋』卷一「都聚樂の舊地ゆめ物語の事」、『剪燈新話』<sup>(27)</sup>卷二「天臺訪隱錄」、同卷三「富貴發跡司志」、同卷四「龍頭靈會錄」、謡曲修羅物の構成などを参照したことが明らかにされている。今日までの探索と検証によって典拠となった文献や作品はほとんど明らかめられたと考えてよいであろうとは、勝食壽一の研究によるのである。

「佛法僧」は、徳川政權下、拜志夢然という風流三昧の樂隱居とその子作之治が遊山の途次高野山に詣でて奥の院で夜を明かした際、この山で自刃して果てた豊臣秀次の一行の亡霊が現われ、見つかって、その一行の酒宴に呼ばれたが、それが亡霊の一行であったということも知らないままで修羅の刻限になるまでいた。この怪異談が書かれるにあたって、話の骨格を形成するにヒントを考えた主な典拠として、『怪談とのり』卷之四「伏見桃山亡霊行列の事」の存在が知られている。

はやく、藤井乙男氏は「佛法僧」と『とのり袋』卷之四の記事との関係について、つぎのように述べられた。

秋成も又この桃山亡霊行列の風説を聞込みて、よき種ござんなれ、風説のままにては働きなしと、高山野に持込みて此一篇を構へしにあらじか、時節を三月の末としたる、行列の様といひ、夢然が「京人に語りしをそが、ままにしるしぬ」と結びたるなど、とのり袋の記事とよく叶へり。

これによると、藤井氏は、秋成は「とのり袋」の記事に關つたのではなく、當時巷間に流布していた『とのり袋』の記事と同内容の風説に觸發されて、「佛法僧」の想を構えたと考えられたようである。

その後この説に對して賛否兩論が行われたが、後藤圓治が、兩作品の全體的な構成の類似と、記述の一致するところのあることを説いて、「伏見桃山亡霊の行列の事」が「佛法僧」の直接の典拠となったことを立證された。<sup>(29)</sup>

ところで、秋成は、その噂話的性格といかに關つていくか—典拠作品の噂話的性格をどのように取り入れ、いかに活用するか、もしくは、噂話と怪異小説である「佛法僧」との違いをいかに明確化するか—という問題が、「佛法僧」の全體的な構想に、あつて秋成の基本的な課題となつたと考えられるのである。

『とのり袋』の文藝的性格として特徴的なことは、その底を流れる民衆の生々しい恐怖の感情を書き留めたことである。この噂話は、京都の伏見桃山という怨敵秀吉の榮華の地と、殺生關白と

25) 戴恩記：元祿十五年刊の松永貞徳（紹巴の門人）著。

26) 加婢子：十三册、淺井了意作、寛文六年刊、奇事異聞を集めた怪異小説集。

27) 剪燈新話：明の時代、瞿佑作、有名な支那の怪異小説。

28) 藤井乙男：怪談物語「雨月物語」の研究者。

29) 後藤圓治：怪談物語「雨月物語」の研究者。

いう暴逆非道な人物としての秀次のイメージに、噴出の機会をうかがっているであろう横死者の怨恨と、百鬼夜行への素朴な恐怖な感情などが交ぜられて成立している。『とのみ袋』の措辭や辭句が殊更にそれと分かる形で取り入れられていることから見ても、秋成が『とのみ袋』の存在を暗示することによって、讀者の胸中にある生々しい恐怖の感情を掻き立てようとする意圖があったことがわかる。大衆の、そして讀者の心に内在する恐怖の感情を代辯する者として設定されたのが夢然であった。

秋成は、「佛法僧」という怪異小説に怪異の存在自體の意義を問い明らめるに、また、「佛法僧」の基本構想と創作性の意義に、秀次という人間の生死と現形の意味そのものを問い直したのである。その構想にあたって、「伏見桃山亡靈の行列の事」から何を取り入れ、どのように作り變え新たに何を加えたかと調べて見ることにする。

兩作品を比較すれば、文の初めに春三月花見の記述のあること。日が暮れて夜になること。亡靈の行列に出合うこと。その亡靈が秀次主従であること。行列の主が何びとであるかをその供人に問うこと。怪異事件の終結とともに夜が明けること。京都市内に入ることの諸點が共通することを説いておられる。

つぎに内容に改變を加えた部分は秀次一行の亡靈の出現の場が、高野山の奥の院に設定されていることである。

その他に次のように新たに加えた部分がある。

冒頭に徳川の世の泰平を贊美する記述があること、風流人夢然父子の遊山のさまと、高野山の自然の行まいが描かれていること、佛法僧の鳴聲と弘法大師の詩偈についての考證的言説のあること、亡靈の一行が大師の御廟の前で酒宴を開くこと、里村紹巴が大師の玉川の歌の解釋について見解を述べること、夢然が秀次に句を奉り、小姓が付句をすること、修羅の闘争が描かれていること。惡逆塚の恐怖が描かれていることなどである。

ところで、秋成は、何故典據から取り入れの他に以上のような改變を加え、新たに多くのものを加えたかについて、作者の意圖と全體的な構想の連關性について調べると、重友氏はつぎのように述べておられる。

秀次一行の幽鬼が伏見桃山のあたりを徘徊するといふよりも、寧ろこれを彼が自刃の場所である高野山へもって來ることの方に、一層の凄滄味を加えることができるという、怪談小説としての効果を高める意圖の下になされたものであることを否定しがたいのではあるが、しかしもっと有力な原因は、この地が秋成曾遊の地であり、従つてその折りの見聞、感想をこの機会に生かそうとする欲求が作者に強く働きかけていたことにあったがためであると考えられるのである。

30) 重友毅：怪談物語「雨月物語」の研究者。

怪異談が通例怪異出現の場を死去の場もしくは怨念生成の地に求めていることから見れば、秀次出現の場も、秀次が自刃した青巖寺とか、その墓がある光臺院、または秀次の子供妻妾が斬首された京都三條河原とかまたは、家族達の墓がある瑞泉寺境内の悪逆塚などに設定されるのが妥当であると思われるが、それが高野山の、とくに靈域である奥の院に設定されたことには、ある特別な意圖があったことを考慮しなければなるまい。

その意圖として第一に考えられることは、それがのちの玉川の歌考證のために、玉川の流れる奥の院御廟橋のあたりが舞臺にえらばれたことである。第二に御廟に至る參道には大小名その他貴賤道俗の墓碑、供養塔數十萬が立ち並ぶ、靈魂集參の地であることである。そこには豊臣、徳川に對する忠臣、逆臣の靈が同居しており、修羅の闘争の場としても適地であつたことが考えられる。

「佛法僧」が、作者の高野山遊覽の經驗に基づいて構想されたことから見ても、奥の院の地が選び取られたことの意味は見逃し得ない。

秋成は、自分の抱く玉川の歌の歌考證の解釋を披瀝するためのそれとない準備となっていることは言うまでもないであろう。

### 3. 登場人物と歌のやり取り

うらやすの國ひさしく、民作業をたのしむあまりに、春は花のもとに息らひ、秋は錦の林を尋ね、しらぬ火の筑紫路もしらでは械まくらす人の、富士筑波の嶺々を心にしむるぞそぞろなるかな(佛法僧)

そのリズムカルで繪画的な色彩感に富む道行文的な構成、平穩、泰平な時代相と登場人物の風雅な諸國遊歷を暗示する冒頭文は、長い間徳川幕府の統治のもとに、のどかで泰平な世のさまと、物見遊山をして平和を楽しむ民衆のことを記し、ついで、風流な俳諧師拜志氏の人夢然父子の行樂のさまと、その餘裕ある生活ぶりが點出されている。父子は行樂の途次高野山に詣でて、奥の院のあたりで道に迷い、靈廟の前で夜を明かすことになる。しかし、「この山では、すべて旅人に一夜の宿を貸すことはありません。寺院や僧坊に縁のない人は、麓にくだつて泊り、夜を明かさなければなりません。」と、僧坊から語つて聞かせられた。夢然は、「旅は野宿ということがあつてこそ、趣があり、面白いのだ。この靈山にわざわざ參詣して、お通夜申し上げ、來世の安樂をお願いしなければならないところであるが、<sup>(31)</sup> ちょうどよい機會であるから、靈廟に終夜、法供養申し上げよう」といって、靈廟の前にある燈籠堂の簀子縁に上つて、心靜かに念佛を唱いながら、夜明かしていた。

31) 燈籠堂：高野山の堂名。



ところが、靈廟のうしろの林から「ブツパン、ブツパン」鳴く鳥の聲が響いて聞えるのを夢然は聞いて「あゝめずらしいことだ。あの鳴いている鳥こそ佛法僧という鳥であろう。前々からこの山に栖んでいるとは聞いていたが、本當にその鳴き聲を聞いたという人もいないのに、今夜ここに宿ってその聲を聞いたのは、まことに滅罪生善の前兆でもあろうか。あの鳥は清淨の地をえらんで栖むとのことである。とりわけ、この高野山に栖むことは、眞言宗の開祖弘法大師のお詠みになった次の詩偈があつて世間の人にはよく知っている。

寒材獨坐草堂曉 三寶之聲聞一鳥 一鳥有人有心 性心雲水俱了々  
また古歌にも次のようなものがある。  
松の尾の峰靜なる曙に、あふぎて聞けば佛法僧鳴く。

この松尾の歌は、その昔、最福寺の延郎法師は世に二人とない法華經の信奉者であつたので、松尾神社の祭神が、この佛法僧をいつも延郎に仕えさせられたことを言い傳えているから、その松尾神社の境内に栖んでいることがわかる。夢然は日頃たしなんでいる俳諧の十七文字を、しばらく思案してよみあげた。

鳥の音も秘密の山の茂みかな

と尋きつけたが寺院の方から一行の武士が近ずいて先拂いの若侍が橋板を荒々しく踏みならしてやつて來た。いわば、夢然が佛法僧の聲を聞いて、一句をものしている時に、遠くから「下に下に」という聲が聞え、やがて前驅の若侍の姿が近づいてきた。いよいよ秀次亡靈の一行の出現である。

夢然父子は驚いて、堂の簀子の縁より下りて、地面に上下座した。間もなく多くの足音が聞える中に杵音が高く響いて、烏帽子<sup>(32)</sup>、直衣<sup>(33)</sup>を召された貴人が堂にお上りになると、おつきの武士四、五人ほどがその右左に座をしめた。また一群の足音がして、いかめしい様子をした武士や頭を剃った入道などがその中に交つてやつて來て、貴人に敬禮して堂にのぼつた。貴人はいま來た武士にむかつて「常陸介<sup>(35)</sup>はどうして遅くなつたのか」と申されると、その武士は、「白江<sup>(36)</sup>、熊谷<sup>(37)</sup>の兩人が殿下に御酒をさし上げるといつて、まめまめしく働いているので、私も新鮮な酒肴を一品ととのえ申し上げようとしたため、お伴におくれたのです」と申し上げる。それからあちらの人、こちらの人と盃をとり交して面白そうであつた。貴人はまた、「ここ久しく紹巴のはなしを聞かない。呼

32) 杵：桐で出來た黒漆塗りの淺杵。

33) 烏帽子：貴人が平服の際に冠つた。位階により形と塗りがちがう。

34) 直衣：中古以來の貴人の平常服。

35) 木村常陸介重茲。重成の父、關白豊臣秀次高野山で自刃するや、罪を得て攝津の大門寺で自殺した。

36) 白江：豊臣秀次の臣下。

37) 熊谷：熊谷大膳亮直之。秀次歿後嵯峨天皇二尊院で秀次に殉じた。年十八歳。

べ」と仰せられると、夢然が土下座していた背後から、體格の大きい法師が、僧衣の身をととのえ末座に連った。貴人は古歌や古事などについてあれこれ問いたずねられると、その法師はお答え申し上げる。貴人はいよいよ感心されて、「かれに褒美を與えよ」と仰せになった。また一人の武士がその<sup>(38)</sup>紹巴法師にこの高野山は高德の弘法大師がお聞きになり、土石草木に至るまで、靈魂をもたないものはないと聞く。それなのに玉川の水には毒があつて、人がこれを飲む時は死ぬのですか。大師がお詠みになった歌だとして、

わすれても汲みやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水

という和歌に紹巴は後世の人が毒があるという作りごとである。毒のある流れにどうして「玉」という語を冠せることがありましようか。

御堂の後の方で「ブツパン、ブツパン」と鳴く聲が近く聞えると、貴人は盃をさし上げられて、「例の鳥はさっぱり鳴かなかつたのに、これで今夜の酒宴に一層の興を加えたことだ。紹巴一句どうだ」と仰せになる。法師は恐縮して、「私の句は、殿下もお聞きふるしてございましょう。

ここに旅人の通夜しておるものが、當世の俳諧を口ずさんでおりました。殿下にはめずらしくおいででしょうから、呼んでお聞き下さい」というと「その者を呼べ」と仰せになると、法師は夢然に向つて、「さきほど口ずさんでいた秘密の山という句を殿下に早く申し上げよ」という。

夢然はますます恐れて、「殿下と仰せられる方はどなたでおいでですか。ときくと法師は、「殿下と申し上げる方は、關白秀次でおいでになる。ここの人々は、木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大善、悪野奎、日比野下野、山口少雲、丸毛不心、隆西入道、山本殿、山田三十郎不破萬作、こういう自分は紹巴法橋である。さきの句を早く申し上げよ」という。恐ろしくて筆つかいぎこちなく書きつけてさし出すのを、小姓の主殿が受け取り、聲高く吟詠した。

鳥の音も秘密の山の茂みかな

貴人はこれをお聞きになつて、「小ざかしくもうまく詠んだなあ。誰かこれに付句をいたせ」と仰せられると、山田三十郎が座を進み出て、「私が付句をいたしましょう」といって、しばらく首を傾け思案していたが

芥子たき明すみじか夜の牀

と詠んだのを紹巴は「立派にお詠みになりました」といって、紹巴がさし出すのを、殿下は御覽になつて、「これはまずくない」と感心されて、また盃をさし上げられ、一座の間にめぐらしになつ

38) 紹巴：里村紹巴、連歌師、奈良の人。豊臣秀吉、秀次に寵せられ、秀次に味方した嫌疑で秀次没後三井寺に蟄居したが、後赦されて慶長七年(一六〇二)歿年七十六。

た。

やがて曉近くになる。急に亡霊一行はあわて出し、もはや修羅地獄に戻る時刻であるという。

關白秀次は、例の冷酷な本性をむき出して、「つまらぬ人間達夢然父子に見せてしまった。一所に地獄へ連れてゆけ」というのを家臣らが「いまだ命のつきざる者なり。例の悪行なせさせ給ひそ」といってそれをとめた。こうそうしているうちに、人々の姿は次第に消えてしまった。

秋成は「芥子たき明すみじか夜の牀」の「芥子」はからしであるが、眞言宗ではこれを焚いて加持祈禱をする。前の發句「鳥の音も秘密の山の茂みかな」を受けて密教（眞言宗）の護摩壇を想像し、「芥子たき明す」と續けたのである。なお發句は「茂み」で季が夏であるから、連歌の作法に従って「短夜の牀」とやはり夏の季で受けたのである。この句の意味は、夏の短夜を一晩中芥子をたいている護摩壇にも今や夜がしらじらと明けそめた。（その時鳥の神秘的な聲が聞えて来た）という意である。とうとう見つかった夢然は、さきに詠んだ俳句を披露せよという仰せで仕方なく、ふたたび先の俳句を申すと、貴人に褒められた。しかし夢然はこの人々が亡霊であることを知って、生きた心地もなかった。

登場の場合も、初めは貴人の名前はわからないが、人々の會話から豊臣秀次の家臣またはお付きである常陸とか、白江とか熊谷、また萬作などという武士の名がいたし、貴人の名前を秘し、その家臣らの名を出して、この一行が關白秀次の一行であることを暗示している。普通の怪異小説であれば、はじめから「そこへ關白秀次の一行が来た」というふうを書くであろうが、あからさまにそう書かないところに、作者の寫實的な手腕があり、またまことに自然の出し方であり、巧妙であると言えよう。

#### 4. 「佛法僧」とその文藝性

上田秋成の文學、とくに「雨月物語」は、その幻想的にして浪漫的な題材と和漢の古典の知識を駆使した文體によって、多くの愛讀者を獲得してきた。秋成は當時からすでに「近世畸傳」に採られており、傳說的興味の對象とされていた。その強い個性の故に、現在でも多くの文學者の好むところである。又數多くの研究者の關心をもさそっている。秋成が最初に試みた小説は、和譯太郎と署名した「<sup>(39)</sup>諸道聽耳世間猿」および「<sup>(40)</sup>世間妾形氣」など社會の矛盾や缺陷の描寫の中に滑稽感を盛り風刺を試みたような作風であつて、のら者と自稱した彼の生活體驗から生れたものであつた。それらの作品は、八文字屋末期の低俗な作品中では、<sup>(41)</sup>そのころの町人の生き方や、作者の同感をこめた人間などを描き出して、やはり注目すべきものとなつていたが、當時の上方の町人生活がこうした風刺的作品を續出させるほどの積極性も失つていたし、秋成自身としても、もはや寫

39) 諸道聽耳世間猿：一七六六年、秋成の書いた浮世草子、

40) 世間妾形氣：世間の風俗をおもしろく書いたもの。

41) 八文字屋：江戸時代京都の駄屋町通智願寺下ルにあった出版書肆。

實的な發想の中に安住しえないものを感じていた。たまたま宇萬伎に按したことなどが機縁となつて、庭鐘らによつて始められた中國小説翻案の方法によつて、現實を離れた歴史や幻想の世界に生きようとしたのである。こうして雨月物語の初稿は、それら浮世草子とあまり時を隔てない明和五年(一七六八)ごろにすでに成つていたらしく、刊行された安永五年(一七七六)まで推敲が重ねられていたといわれる。

秋成の「雨月物語」の典據は廣汎多様であり、また同一説話についても異なる文獻を綿密に照合していることなどが見られるのである。秋成はあくまで單なる典據たるにとどまり、構想にも叙述描寫にも全く彼自身の新しいものを創り出している。説話の背景となる時代や場所の選定、自然描寫による雰圍氣の醸成などに彼の古典的教養はよく活かされていて、古傳説古歌などが随時に適切に利用されてきわめて効果的である。けれども作品の最も著しい特色は、そうした古典的浪漫的色調の中に鬼氣迫る凄慘な怪談が組み立てられていることであつて、久しく行われてきた怪異小説の一つの頂點を示している。秋成の描いた怪異は緊迫した戰慄感を興える陰慘なもので、ことに幽靈の出現や消滅前後の譬えようのない不氣味さは、おそらく古今獨歩と言えるであろう。

秋成の怪異作品には、すぐれた技巧を生んだ彼の藝術的才能としてでなく、自己に忠實であるがために佛法僧は人生の敗者として歴史の中に埋れ、不幸の暗黒に沈まねばならなかった人間をとらえ、その絶ち切れぬ執着の念の凝つたものとして亡靈を描き怪異を叙している。そこに、純粹であり潔癖であるがゆえに世俗に迎合しえなかつた作者自身の分身投影が見られると同時に、抑壓されたさまざまな人間の情意の解放が、非現實の世界で思うままになされているのは秋成の理想であり浪漫であるとも考えられるのであつて、それはまた眞淵<sup>(42)</sup>などの思想を受けた國學者としての秋成の立場のおのずからの反映でもあつたといえる「雨月物語」の文體は稚文脈が主となっているが、綾足<sup>(43)</sup>のような古語稚語にとらわれることなく、優婉、凄壯、雄強を兼ねてよく景情を盡している。

また「佛法僧」も知識的要素を含んだ叙述も多く、それらには彼自身の見解や主張を盛り込んで幅の廣い深みのある作品を成し上げている。

秋成はこの「雨月物語」を成立させるにあつて、すでに浮世草子の二作を出版して、十分小説の技倆を身につけた彼は、見事に流麗でおもしろく、迫眞的な小説の創造に成功したといえるのである。確かに「雨月物語」を當時の稚文小説、中國小説、また怪談小説に比べるならば、それぞれに不足している小説的な何物かを補つており、比肩すべき他の作品のないことは事實である。

これが傑作ということではなく、この作品に對してどういふ現代的評價を考えるべきかということになると、いろいろに議論が分れてくるのである。たとえば第一に、怪異小説に記して秋成が「白峯」において自己のうつ屈した正義感あるいは世界觀をおちまけたのだとする説、第二に「菊

42) 眞淵：賀茂眞淵で江戸時代の國學大家。

43) 綾足：賀茂眞淵の弟子、國學者、建部綾足。

花の約」においての信義、何か倫理を説こうとしたという見解、「淺茅が宿」の貞節、そのほか、稚文の美しさを見せようとしたもの、怪談のおもしろさをねらったものなどと、いろいろの見解があつて一定しない。

兎に角、「雨月物語」は、實は中國小説に元があつたといわなければならない。しかし中國小説では人を納得させることができないから、考證を重ねて日本の歴史の上の話にし、いかにも眞實であつたかのごとく叙述する。しかもその叙述には、程度の高い雅文を用い、耳遠い古語を駆使して格調を高めているのである。こういう中國小説、史實の考證、古語などは、一言でいえばこの作の知識性をあらわしている。とすれば、この作は軽々の現代小説ではなく、あくまでも學者的な程度の高い小説を企圖していることは明瞭であろう。つまり秋成は、自己の學識の餘技としてこの小説を書いているのであり、高度であることによって、小説の藝術性の増加をはかっているのであつて、いわば「雨月物語」は藝術派の文學ともいえるのである。これは「雨月物語」に限らず、安永期に興つた一つの文學精神であつた。即ち、「雨月物語」は安永期<sup>(44)</sup>のそういう文人精神を持った藝術主義の運動の一環としてあつたことから、この作を單に秋成の風刺文學とか倫理文學と考えることは考え過ぎであるといわなければならない。勿論文學には、作者の世界觀や性格は反映する。しかし、それをもってこの作の唯一の價値であるとするのは、藝術主義の文學に對する淺い見方である。

秋成の「雨月物語」は美しい作品である。美しいものは美しいがために人を感動させる。それが幻想の世界であらうと、何であらうと、美しいものは人を引きつけるのである。「雨月物語」の鑑賞は美の理解が唯一の方法であるともいえよう。

### 三、結 論

遊山の途次、夢然父子は高野山に詣でて、奥の院で夜明かすうちに佛法僧の鳴き聲を聞き、弘法大師の詩偈<sup>(45)</sup>や藤原光俊の歌<sup>(46)</sup>および延明法師についての言ひ傳えを語り、詩心をおこして發句を詠む。

この佛法僧という鳥の鳴き聲を機縁として夢然が秀次一行の亡靈の前に呼び出され、發句を披露するという構想である。風流三昧の樂陰居として登場した夢然は、風雅の旅を楽しむ法體の樂隱居であつて、その身分、境遇は、言わば徳川治政下の泰平の世を楽しむ庶民の代表であつて、政權爭奪によつて生ずる怨念とは無縁の存在である。そのために彼は殺生關白の怨靈に對する民衆の素朴な恐怖の感情を代辯する存在でもあり得る。

44) 安永期：後桃園、光格天皇時代の年號（一七七二～一七八一年）

45) 詩 偈：佛德を讃え、法義をのべるためにつくつた詩。

46) 藤原光俊：新撰六帖、去來集。

しかし、夢然の存在の意味はそれに止まらない。秀次亡霊一行の登場を待つ間に披瀝される夢然の高い教養性は、夢然を怨霊の横行を恐怖する民衆の代表の位置から、怨霊出現の意味を問いかける読者の位置に轉化せしめる。弘法大師贊仰の言葉、開山の由來や佛法僧鳥の講釋、大師の詩偈、延明法師<sup>(47)</sup>の和歌への造詣の披瀝、俳諧ぶりなど、秀次亡霊の登場に先立つ長い導入部は、このような夢然の位置の確定のためにふさわしく、すぐれている構想と思われる。彼は、民間傳承の素朴な恐怖の感情を現實のものとして読者に伝える働きをするとともに、永劫の怨念を抱いて現世に立ち戻る秀次の、業に囚われた「性」の哀れさを顯現せしめる役割を擔っているといってもよいであろう。

その手近かで現實的な描き方のなかに、秋成は、秀次が風雅集の玉川の歌の考證に関心したり、俳諧の附合に打ち興じたりしている餘裕綽々たる風流の遊びのなかに、秀次の學問に對する興味や風流人的な人柄を窺わせる言動が繰り返してある。その言動からは「冷酷骨をさすそぶり」や「鋭い暴逆の性格」の人物とは對照的な、故事や古歌および學問的な言説に理解を示し、風流人でもあるという秀次像が強調されているように思われるのである。

作者は、この部分において、風流人としての秀次像を強調するとともに、亡霊の口から大師の靈徳を贊仰する言葉を繰り返させることによって、亡霊が秀次一行であることを知らされて、「頭に髪あらばふとるべきばかりに凄まじく肝魂も虚にかへるこゝちして、振ふ振ふ、頭陀袋<sup>(48)</sup>より清き紙取出て、筆もしどろに書きつけてさし出す」という夢然の恐怖感と對置し、當時民間に伝えられていた殺生關白としての秀次像、および怨念を持って泰平の世に出没する怨霊としての秀次像の恐怖のイメージに修正を求めることになつたと考えられる。

しかし、このことは読者が既成のイメージを持って本篇に接し、物語の中にそれを求め、確認しようとする讀みの型を否定するものではない。むしろ、そのような読者の要請が強いがために、物語の内容との異和感は擴大する。つまり『太閤記』の記述や當時の噂話などによって、殺生關白という秀次のイメージを持って本篇に接した読者は、この部分に至つて、夢然と同様の恐怖をあじわうとともに、自らの抱く秀次のイメージとこの部分の描き方との間に大きな異和感を感じ、ついで、秋成がこのような秀次像を描いた意圖、および夢然と秀次一行との出會いを通して作者が訴えようと主題について、考えることを求められることになるのである。

いま秀次一行について見れば、「橋板をあらゝかに踏て」登場する騒々しい怨霊の出現は、それ自體が恐怖感を伴うことはない。眼前に展開される夜宴の異様さに對する不審の念と、會話に登場する豊臣秀次の臣下である、常陸、白江、熊谷、萬作、紹巴などの名から呼び起こされる怨霊出現の豫感が、「關白秀次公にてわたらせ給ふ」という一言によって「頭に髪あらばふとるべきばかり

47) 延明法師：但馬の人、天臺宗の高僧。

48) 頭陀袋：頭陀は梵語で把鉢僧の意、その僧が頸にかける袋。中に經卷、食器などを入れる。

りに凄しく肝魂も虚にかへるこゝち」の恐怖を引き起こす。民衆の脳中に定着した怨霊畏怖の感情の確認である。

しかしながら、一行は怨霊が本来備えているはずの暴逆的な性格を徹塵も感じさせない。夢然が抱く恐怖の感情との間に生ずる奇妙な印象の齟齬は、読者に強い不審の念を起こす。

このように、これらの表現に、対立するイメージと、それが生み出す不安な感情を掻き立てる意圖があることは明白であろう。

修羅の時に至り、それまでの高野の静穏な雰圍氣は一舉に魔的な世界に轉化する。一行の修羅の争闘が描かれ、阿修羅の將と化した秀次の、夢然をも地獄へ引き連れようとする暴逆的な性格が集約的に示される。ここで修羅の刻限に至って場面が急轉回し、それまで談論や酒宴に興じていた亡霊たちが、一舉に怨恨をもって果てしない苦患の闘争を繰り返す怨霊に轉化するという構成である。

亡霊が秀次の一行であることを知らされた夢然の恐怖は、この場面に至って最高潮に達するのであり、読者もまた、自らの抱いていたイメージと違わぬ秀次の暴逆的な言葉に戦慄をおぼえるとともに、この長い泰平の世の裏側で果てしない闘争を繰り返す怨恨の凄まじさに、改めて強い恐怖を感じるようになるのである。

秋成は、修羅の時に至り、それまでの高野の静穏な雰圍氣を一舉に魔的な世界に急轉化させることによって秀次像の二つの面を表わし得たことになる。この方法を用いることによって、大師の靈感のもとに風流な談論や酒宴に興じている秀次の心の中に、讒言をもって自分を歴史の舞臺から追い落した者達への盡きることのない怨恨のあることを示し、夢然と秀次との出会いを通して、泰平の世の裏で、歴史の流れにうつもれた者達の夥しい怨恨と、永遠の闘いが繰り返されていることを表わそうとしたと考えられるのである。夢然は自身の恐怖を實感として読者に伝えられるとともに、読者に對して、彼らの住む平和なこの世の裏に、秀次のような怨恨が夥しくうずまき、ひしめいていることを、實感として再確認させる役割を擔つていると言える。

## 國 文 抄 錄

上田秋成은 日本 江戸時代『雨月物語』의 作家이며, 「佛法僧」는 『雨月物語』의 第五話이다. 이 作品은 그가 眞言宗의 總本山인 高野山에 유람차 갔다가 高野深山에서 들은 두견새 울음등의 自身の 見聞·感想과 더불어 그 곳에서 죽은 豐臣秀次(1568~95)에 관해서 쓴 怪談 小説이다. 이 作品에 깔려 있는 幻想의 이고도 浪漫的인 色彩는 日本과 中國의 많은 古典文獻과 作品을 典據로 하고 있는데, 古傳說 古歌등을 수시로 適切하게 驅使함으로써 作品의 格調와 效果를 높이고 있다. 秋成은 豐臣秀次를 作品의 主人公으로 設定했는데, 秀次는 朝鮮 壬辰亂, 丁酉亂, 무렵에 非命에 간 歷史의 敗北者로서, 豐臣秀吉의 조카이다.

秋成가 現實에서 隔離된 歷史上的 人物인 秀次의 怨靈을 題材로 든 것은 그가 살았던 時代 德川幕府의 엄격한 抵觸을 피하기 위한 文學의 手法이었으며, 秀次의 怨靈을 顯現시킴으로써 그것이 마치 現實인 것처럼 叙述하고 있다. 그리고 그 必然的인 發現의 樣相도 超現實的인 事件을 통해 展開시키고 縹渺한 浪漫的인 氛圍氣 속에서, 非命에 간 恨많은 魂靈의 生死와 現形의 意味를 再確認하려는 意圖로서 構成한 것이다.

豐臣秀吉(1536~1598)은 對外的으로는 中國大陸과, 朝鮮半島를 수 차례 侵略했을뿐 만 아니라, 日本 國內에서도 勢力을 掌握하고 스스로는 有名無實한 天皇의 唯一補佐官인 關白이 되었다. 그러나, 그는 子息이 없는 탓으로, 關白職을 自己家門만이 永遠토록 누릴 수 없게 되자 누님의 아들인 秀次를 세워 讓位하여, 聚落第라는 이름의 京都에 있는 自己집에 살게 했다.

그러나 그 後 自身の 아들이 태어나고 秀次關白 밑에 있는 官吏들이 그의 말을 잘 안 듣자 그 關白職을 再次 차지하려는 慾心이 생기게 된다. 結局은 秀次에게는 事實無根일지도 모르는 惡毒한 殺生關白이라는 評이 나돌고 드디어는 秀吉에 대한 謀反을 꾀한다는 奸臣들의 거짓 참소가 進言되어, 秀次를 關白職에서 追放하고 高野山에서 割腹自殺을 強要한 것이다.

「佛法僧」의 主人公 秀次의 主從一行을 靈地인 高野山에서 만난 風流人 夢然은 庶民의 代表였고 政權爭奪에 依한 怨靈과는 無關한 存在이다. 그러기때문에 夢然은 殺生關白에 對한 民衆의 素朴한 恐怖感情을 代辯하는 存在이기도 하다. 即 夢然은 怪異와의 邂逅라는 稀有한 體驗을 한 人物인 同時에 怪異의 存在理由를 알아채는 人物로 設定된 것이다. 그는 民間傳承의 素朴한 恐怖의 感情을 現實의 것으로 讀者에게 傳하는 役割을 함과 同時에 永劫의 怨念을 품고 極樂世界에 安住할 수 없이 떠돌아 다니는 불쌍한 亡靈을 顯形시키는 役割도 맡고 있다. 作品은 變轉에서 翻弄된 悲劇의 人物을 題材로 하여 構成했다. 俳諧師 夢然父子가 高野山에 參拜하고 本堂에



서念佛하면서 徹夜野宿을 하는데, 秀次主從一行인, 武士한패가 나타나서 酒宴에 부를 뿐만 아니라 하마터면 地獄에 까지 끌려갈 뻔 했다는 것이다.

秀次 亡靈은 前에 自身이 割腹을 強要 당했던 그 場所에 한 밤중에 나타나서 酒宴을 즐기며 「두견새」우는 소리와 風雅集에 있는 「玉川の歌」의 考證에 關心을 갖고 흥겨워 한다. 그 餘裕만만하게 風流를 즐기는 속에서 夢然은 秀次の 學問에 對한 興味와 風流人的인 人品을 짐작 할 수 있었다. 秋成은 그러한 亡靈의 言動을 通해서 暴惡한 性格의 人物과는 對照的인 故事나 古歌 및 學問的 理解를 지닌 風流人이기도 한 秀次像을 強調하고 있다고 생각된다. 따라서 이것은 當時 民間 속에서 傳해지듯이 秀次란 人物이 殺生關白도 아니며 無事太平한 世上에 出沒하는 怨靈도 아닐 것이라는, 從來의 秀次の 이미지에 對한 修正을 暗示하는 것이라 하겠다.

即 夢然은 秀次에게서 그가 本來지너 마땅할 暴惡한 性格을 조금도 느낄 수 없었던 것이다.

그러나 修羅의 時刻에 이르자 그때까지의 高野山の 平和로운 氛圍氣와는 달리 갑자기 魔的인 世界로 轉化한다. 亡靈一行은 讒言者에 對한 鬪爭으로 突入하고 阿修羅의 大將으로 變貌된 秀次가 하찮은 人間들에게 自身의 모습을 드러냈다면서 地獄에 끌고 가자라는 暴惡한 性格을 集約的으로 나타낸다. 즉 秀次の 兩面性을 描寫하고자 한 것 같다. 싸움의 是非如何間에 저승에서는 雙方 모두 地獄에 떨어진다는 理致에도 불구하고, 眞言宗의 開祖, 弘法大師의 靈威下에 秀次の 靈魂은 救濟를 받고 그 덕택에 風流的인 談論이나 酒宴을 즐길 수 있는 것이다. 그러나 秀次の 心中에는 거짓 讒訴로써, 自身을 歷史의 舞臺에서 낙오시킨者들에 對한 怨恨의 感性이 일어나게 된다.

이것은 秋成가, 夢然과 秀次와의 邂逅를 通하여 泰平한 世上의 裏面에는 悲慘한 歷史의 犧牲者의 怨恨과 鬪爭이 계속되고 있다는 것을 나타낸 것이다.

夢然은 自身의 恐怖를 實感나게 讀者에게 傳達함과 同時에 讀者를 向해서 그들이 살고 있는 時代 즉 平和로운 이 世上의 裏面에는 秀次와 같이 억울하게 희생된 怨靈이 떠돌고 있음을 強調하고 想起시키고 있는 것이라 생각된다.